

日本人建築家夫婦、アメリカ東海岸でがんばる
第一回

アメリカの視点、自分の視点

河井容子 with 栗本貴哉

はじめに一伝えたいこと

私達は、米国で設計事務所を経営している。建築とランドスケープの設計、アーバンデザインの研究・コンサルティングを、自分達だけで全部まかなう小さな事務所である。場所はコネチカット州のニューヘイヴン近辺にあり、ニューヨークとボストンの真ん中くらい。ここはイエール大学の大学街であり、私達はそこで、日本の空間について教えたりもしている。



ニューヘイヴンの街をのぞむ

この連載では、米国東海岸の様々な生活風景を描いていく。日々の生活や目にすることは、点景としてしか描けないから、徒然の雑文である。でも、そうした点景の重なりから、伝わるかと思っていることも、密かにある。それは「多様性と競争の国アメリカで、自分の場所・存在意義をつくりつつある私達」という自画像である。それはたぶん、お洒落で先進的な米国暮らしという、この種のエッセーから多くの読者が予測するものとは、違うだろうと思う。

多国籍の国アメリカでも、外国人が長く住みつき、キャリアを築きながら生きるには、クリアすべき条件がある。まずは言語で、その習得は容易ではないのだが（だから失敗談も多いのだけれど）、それは当然のこととしておいておく。それよりももっと大事な条件が二つあって、それは、アメリカ人の視点を理解することと、自分自身の視点をもつことである。

視点というと抽象的すぎるかもしれない。アメリカの個人や、企業、政府が、こういう時には、こういう動機で、こう動くよ、という思考回路を推測し、必要なら自分もその立場にたってみる、というのが、彼らの視点を理解することだと思う。大人になってから米国にきた私達は、彼らと同じ回路をもたない。仕事や生活のなかで、驚きや失敗や観察を繰り返す

返して、彼らの視点を学習してきた。くわえて自分が経営者である、つまりアメリカ人に設計というサービスを売らねばならないという事実は、「彼らの立場にたってみる」という練習を私達に強要してきたように思う。

アメリカは人種の坩堝だという表現は、どうも間違っている。アメリカという壺のなかで、様々な人種と文化をもつ人々は、シチューの具材のように溶けあってはいない。そこでは常に「おまえは何者か、この国に何を提供できるのか」を問い詰められ、だから私達も、それを考え続けてきた。その答えのひとつが、自分達のなかにある日本性であり、それが「自分達の視点」の大切な部分だと思う。

渡米当初は、日本建築、日本庭園、日本文化と、やたら自国の文化について質問され、それを背負わされていることへの、とまどいが大きかった。それはステレオタイプへの不満でもあったし、同時に、欧米崇拜の風潮のなかで育って、日本文化の価値を、自分で理解していなかったからでもあった。しかし徐々に、私達の個性と日本性は、どうしても切り離せないものだと気づきはじめる。

それは、教科書に書いてあるような史実や、博物館に展示してあるオブジェが、モノやコトとして、自分と一体化しているというのではない。風景やアートを観てふと感じることや、毎日の設計や生活のなかで、私達が下す多くの判断が、日本の美学・宗教・生活倫理に大きく影響されているということである。

それは何も大げさなことではなくて、マンハッタンのある超高層を私が格好良いと思えば、それは日本の建築・都市を見て育った私が、格好良いと感じたわけであり、そこにそんな超高層を立てるのは不公平だと思えば、その倫理観は日本の両親や社会が、私に教え込んできたことなのである。そうした根っこに私達は気づき、自分から切り離せない日本性であるならばしっかり理解したい、同時に自分達ならではの日本性にしたいと感じるようになったのだと思う。

実はこの二つ、アメリカ人の視点の理解と、自分自身の視点の習得は、表裏一体のものだ。アメリカ人の思考回路を理解すればするほど、それが自分達の回路とは違うことがわかり、自分なりの視点づくりへと目がむく。この連載で紹介する、日々の驚きや失敗や観察の背後に、この表裏一体の何かを追いながら、自分達の場所と存在意義をつくりつつある二人の奮闘を、垣間見ていただけたら嬉しい。(Y)

ペンギン・エンヴァイロンメンタル・デザイン： 米国コネチカット州に本拠地をおく、建築とランドスケープの設計事務所。河井容子と栗本貴哉との共同主宰。一級建築士事務所（大阪府登録）。

本文の著作権は、Penguin Environmental Design L.L.C.に属し、個人使用以外のコピー、配布を禁ずる。本文内容についての問い合わせは、info@PEDarch.com まで。